

第 25 回 (平成 30 年度)

千葉県建築文化賞表彰作品集

千葉県建築文化賞創設25周年記念特集



主催：千葉県 共催：一般社団法人 千葉県建築士会

千葉県建築文化賞について



千葉県知事 森田 健作

平成30年度の千葉県建築文化賞に多くの皆様から御応募をいただき、誠にありがとうございました。

千葉県建築文化賞は、建築文化や居住環境に対する県民の意識の高揚と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的に平成6年度に創設されました。

第25回となる今年度は、75点の応募をいただき、千葉県建築文化賞検討会議による検討内容を踏まえ、最優秀賞1点、優秀賞4点及び入賞4点の合計9点を選定いたしました。

受賞作品は、新築の建物から既存ストックの有効活用と多岐にわたり、地域社会や周辺環境との調和、景観やバリアフリーへの配慮など、いずれも千葉の魅力を高め、地域の活性化に貢献する素晴らしい作品ばかりです。これらの建築物が、地域社会の中で親しまれ、本県の建築文化の向上と、より良いまちづくりの推進に寄与していくことを心から期待しています。

今後とも県では、皆様と共に、首都圏、日本をリードし、未来の千葉を担う次世代の子どもたちが誇れるような千葉県の実現に向け、全力で取り組んでまいりますので、引き続き御理解と御協力をお願いいたします。

結びに、受賞者並びに御応募いただいた皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げまして、あいさついたします。

平成31年3月

目 次

千葉県建築文化賞について	1	御宿 海楽	9
第25回千葉県建築文化賞選考経過と総評	2	ナガレノイエ	9
高田 伊藤邸	3	選考の基準	10
ハレアカラ サービス付高齢者住宅	4	千葉県建築文化賞検討会議	10
シラハマ校舎	5	千葉県建築文化賞の実績(応募点数・受賞作品数)一覧	10
町保の家	6	千葉県建築文化賞創設25周年記念特集	
かぜの小路	7	千葉県建築文化賞の25年	11
旭町診療所	8	千葉県建築文化賞過去表彰作品の紹介	12
新柏クリニック めぐりの庭	8	受賞作品の位置	

第25回千葉県建築文化賞選考経過と総評

応募75点から9点授賞

(選考経過)

千葉県建築文化賞検討会議委員長 北原 理雄

第25回千葉県建築文化賞は平成30年6月の検討会議で募集要領を定め、7月上旬から9月下旬まで応募を受け付け、総数75点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)

第1次選考はすべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真をもとに投票を行い、一般建築物6点、住宅6点を選んだ。次いで11月の3日間をかけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。第2次選考は12月開催の検討会議で、現地調査の報告を踏まえて再度投票を行い、討議を重ねながら優秀な建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある建築物が応募している場合は、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、入賞4点を表彰候補作品として決定した。

多くの魅力的な作品を応募していただいた皆さまの熱意に、この場を借りて深く感謝したい。

募集部門	選考過程	応募点数	現地調査 (第1次選考)	受賞作品選定(第2次選考)		
				最優秀賞	優秀賞	入賞
一般建築物		37	6	0	2	3
住宅		38	6	1	2	1
合計		75	12	1	4	4

(総評)

一般建築物の部への応募は37点で、昨年度の56点から大幅に減少したが、事務所、福祉施設、診療所などを中心に、興味深い作品が見られた。

優秀賞の「シラハマ校舎」は、房総半島最南端の高台に建つ旧小学校木造校舎をリノベーションした複合施設である。地域の学校として親しまれてきた建物を残し、オフィス、簡易宿泊所、シェアキッチンなどを取め、校庭に小屋付のクラインガルテンを配置している。廃校を地域再生の核としてローコストで活用するモデルになることが期待される。

「ハレアカラ サービス付高齢者住宅」は、鉄道駅と市役所を結ぶ通り沿いに建つ木造2階建ての建物で、1階がデイサービスセンター、2階がサービス付高齢者住宅になっている。約40mの間口は住宅サイズに分節され、街路に向かって開放的な1階の構成と相まって、人の気配が感じられるヒューマンスケールの街並みを構成している。

入賞の「旭町診療所」は、中心街に近い住宅地に建つ診療所で、白い切妻型フレームがリズムカルに連続する外観を持ち、分節されたフレームの開口部から降りそそぐ光がL字型プランの内部に広がりを与えている。「御宿 海楽」は、海辺の市街地に建つ老朽化した旅館の再生プロジェクトで、統合サインの活用や戦略的改修によって、地域宿泊施設をローコストでリノベーションするモデルを示している。「新柏クリニック めぐりの庭」は、既存の透折診療所に隣接し、患者や家族が散策し憩うフィットネスガーデンとして整備されたものであり、周辺の山林から連続する緑のネットワークの一部としても豊かな環境を育んでいる。

一般建築物の部

住宅の部の応募は38点であり、前回の25点を大きく上回った。比較的小規模なものが多かったが、いずれも興味深い作品であった。

最優秀賞の「高田 伊藤邸」は、緑豊かな集落のなかに建つ築140年超の農家住宅を保存再生したものであり、長屋門をくぐると重厚な主屋が出迎えてくれる。内部は、伝統的な間取りを活かしながら、快適な現代生活を送れるように配慮されており、梁組をあらわした吹き抜けのホールも見事である。モノとしての民家を保存するだけでなく、そこでの暮らしを維持する“建築文化”のあり方が高く評価された。

優秀賞の「町保の家」は、新しい住宅地の角地に建つアトリエ併設住宅である。棟の低い黒い板張りの平屋が、町並みに溶け込みつつアクセントになっている。レベル差による視線のコントロール、光と風を巧みに取り入れる開口、大きく張りだした庇下の中間領域など、限られた面積のなかで生活を豊かにする密度高い設計がなされている。

「かぜの小路」は、区画整理で開発された新市街地に建つ23戸の賃貸集合住宅である。敷地を通り抜ける中庭状の小路をhasilanで2階建ての4つの棟が配され、小路は子供の遊び場、住民の憩いの場として、生活空間の一部になっている。4種類の住戸もライフスタイル提案型の魅力にあふれ、集まって住むことの楽しさを感じさせてくれる。

入賞の「ナガレノイエ」は、高度成長期に開発された住宅地の一角に建てられた開放的な住宅であり、土間に置かれた大テーブルが食卓、調理台、勉強机などとして多様な役割を果たし、意欲的な生活提案を空間化している。

住宅の部